



手を差し伸べる

今、地球上では武力紛争、パンデミック、気候変動による災害や食糧難など、本当に大変な時代になっていると言えるのではないのでしょうか。その影響を一番受けているのが弱者である、発展途上国の人であったり、子どもたちでしょう。

そのような子どもたちの命と健康を守るために活動している国連機関に u n i c e f (ユニセフ) があります。そのユニセフの広報誌に載っていたものを紹介します。



パンデミックがもたらした未曾有の経済不況をきっかけに、世界の飢餓の状況は急激に悪化しました。栄養不足に苦しむ人は、世界人口の約1割、最大では8億1,100万人にもものぼります。特に、以前から紛争や災害、貧困に苦しんできた途上国の子どもたちにとって、食べられなくなることは生きるための最後の力を奪われることに他なりません。

中東・イエメンの避難キャンプで暮らすゴソンは、もうすぐ2歳になる女の子です。ミサイル攻撃から逃れるために故郷の町から家族と避難してきましたが、父親の収入がなくなると食べ物を買えなくなりました。空腹で抵抗力の落ちたゴソンは、下痢と発熱に苦しみ、そして命を落とす危険性が極めて高い急性栄養不良にたちまち陥ってしまいました。

アフリカのマダガスカル南部では、長引く干ばつのため食糧難が日に日に深刻化しています。14歳のラハは、長男として家族を飢えさせまいと農家の手伝いや薪拾いをし毎日懸命に働いていますが、わずかなイモや米しか手に入れることができず、幼い弟たちはひどい栄養不良状態に陥ってしまいました。地域の保健センターでは、保健員3人が200人を超える急性栄養不良の子どもの治療に追われています。

イエメンのゴソンも、マダガスカルのラハの弟たちも、幸い手遅れになる前に支援を受け、栄養治療食による集中治療で命を取りとめることができました。しかし世界には、こうしたケアに間に合わず力尽きてしまう子どもたちが、あまりにも大勢います。

この文章を読まれて、みなさんはどのような感じられたでしょうか。

日本においても、コロナ禍で貧困が問題になっており、政府や自治体、民間団体等が困っている人たちを助けようとさまざまな活動が展開されています。上記で紹介した国と比べれば、日本はまだまだ経済的に裕福な国で、困っている家庭には十分ではないにしろ支援が届いているように感じます。

しかし、上記の国は違います。他の国々の人たちが手を差し伸べなければますます、飢餓に苦しむ人が増えていくのではないのでしょうか。

最近よく聞くSDGs(持続可能な開発目標)には「2030年までに飢餓をゼロに」という目標が掲げられています。それまで、あと残り8年しかありません。地球に住むみんなが力を合わせてこの目標を達成しなければなりません。困っている人の気持ちをおもんばかり、その人たちに手を差し伸べる、「相手を思いやる気持ち(惻隱の情)」をもつことが大切です。自分だけが良ければそれでよいという考え方ではなく、みんなと一緒に幸せになりたいという気持ちでないと本当の幸せはつかめません。以前、「雨ニモマケズ」の詩を紹介した宮沢賢治は、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と言っています。できることを子どもと一緒に考えてみませんか。

文責＝青少年育成センター指導員 藤村